

『吾輩は猫である』論理

Junko Higasa 2016.2.11

第五章。苦沙弥が前夜の泥棒の盗難告訴を書くところで、盗品の一つである「頂き物の山芋」価格問答がある。夫妻は互いにその値段を知らない。『そんなら十二円五十銭位にして置こう』という主人に「いくら唐津のものでも十二円五十銭は法外です」という細君。そこで主人が「(山芋の値段を知らないのに法外だというのは)まるで論理に合わん。それだから貴様はおタンチン・パレオロガスだというんだ」と言い放つ。この場合、物価を知らずに価格を推定した主人よりも物価を基準に考えた細君が正しいだろう。ここには『トリストラム・シャンディ』の「書物の知識に頼る頭でっかちは現実の適応能力に欠ける」という風刺が写されているように見える。

そして江戸の俗語「オタンチン」と「コンスタンチン」を掛けて表されたのはオスマン帝国に滅ぼされた東ローマ帝国皇帝コンスタンティノス・パレオロガスである。論理的知性派コンスタンティノスは、現実的行動派メフメト2世(オスマン帝国スルタン)の性格を判断するのに、あくまでも自己論理を押し通した結果、メフメト2世を怒らせて徐々に領土を狭めて滅ぼされた。これは「オタンチン」という単体の言葉なら相手が容易に理解できるため、婉曲表現で直接的戦いを避けて勝利したつもりが、書物の知識を用いた複合語よって逆に予想外の戦いを生じて負けた例である。論理に頼る者自己論理に敗れる。